平成 29 年 6 月 11 日付・山陰中央新報

島根県と県立大 里親支援で連携

地域課題解決に向けた島根県と島根県立大学（本部・浜田市野原町）の連携調整会議がこのほど、松江市殿町の県庁であり、本年度の新規事業として、里親支援の充実で連携することを決めた。

里親の養育技術の向上や孤立防止を目指し、県中央児童相談所が子育てに関する勉強会を開き、同大松江キャンパス（松江市浜乃木7丁目）の保育学科の教員らが支援に当たる。

学生もボランティアとして参加し、子どもを世話することで里親への理解を深めるとともに、学生による支援のあり方を探る機会にする。

このほか、県民から県政課題などの意見を聞く「しまねwebモニター」の登録を学生に促すことも確認した。（尾添大介）

平成29年6月13日付・山陰中央新報

西条ガキ 新特産品を

松江・東出雲の農園

園内の一角改装 加工研究所立ち上げ

松江市東出雲町特産・西条ガキの加工品製造を手掛ける「まる福農園」（松江市東出雲町上意東）が、学識者や学生らで西条ガキの加工品を開発する専門機関「西条柿加工研究所」を立ち上げた。干し柿に次ぐ特産品を考案し、地域活性化につなげるのが狙いで、関係者は「西条ガキの新たな可能性を見いだしたい」と意気込んでいる。

（平井優香）

試作したパンの出来栄えを確かめる福岡博義代表（中央）ら

発案したのは同農園の福岡博義代表(74)。これまで柿酢や柿ジュース、柿の葉茶などを商品化する中で「気軽にアイデアを出し合える場をつくりたい」と思い立ち、干し柿作業をする農園内の一角を改装して4月下旬に開設した。100万円を投じてオーブンや冷蔵庫を新調し、試作できる環境を整えた。

活動日は毎週日曜日で、加工品開発に興味がある人であれば誰でも研究員になれる。加工法を研究する県立大短期大学部の赤浦和之教授(62)と、16年から農園で福岡代表に師事する浜松市出身の吉林隆太さん(26)＝松江市学園2丁目＝が賛同、福岡代表と一緒に、干し柿と柿ピューレを使った食パンやカレーパン作りに取り組んでいる。

食パン作りでは、熟した柿のピューレを混ぜたパン生地に、細かく切った3個分の干し柿を練り込み、焼き上げた。ほんのりと黄色く、もちもちとした食感のパンが出来上がり、3人は「これまでで最も良い出来栄えになった」とうなずいた。改良を重ね、年内の商品化を目指す。

柿の加工品研究を手掛ける機関は珍しいという。福岡代表は「加工品作りに意欲を持っている人は気軽に訪れてほしい」と話した。

平成 29 年 6 月 27 日付・山陰中央新報

歌と演劇 子ども笑顔

県立大短大部「ほいくまつり」日頃の成果を発表

松江

県立大短期大学部（松江市浜乃木7丁目）の保育学科の学生が日頃の成果を発表する「ほいくまつり」が24日、松江市殿町の県民会館であり、1、2年生が歌唱や演劇、影絵劇を披露し、約1500人の親子連れを楽しませた。

前身の県立島根女子短期大時代から実施している恒例行事。来年度から四年制学科が開設されるため、短大生のみで実施するまつりは最後になった。

44回目の今回は「ありがとう！～笑顔つなげる夢のバトン～」がテーマ。伝統を後輩につなげるとの思いを込めた。

1、2年生106人が歌唱や衣装、音響、照明など11パートに分かれて運営。ステージでは9人が「ぼくのミックスジュース」「おもちゃのチャチャチャ」など童謡8曲を披露した。影絵劇は「ヤマタノオロチ」、演劇は「しらゆきひめ」を演じた。

家族3人で訪れた島根大付属小2年の神田彩さん(7)は「一緒に歌えて楽しかった」と笑顔。歌唱パートのリーダーを務めた保育学科2年の久保菜々香さん(19)は「子どもたちの笑顔を見ることができてうれしかった」と目を潤ませた。

（平田智士）

歌と踊りで子どもたちを楽しませる学生たち